

ドイツ語前綴り ge- の変遷について

Zum Wandel des deutschen Präfixes ge-

大 島 浩 英
OSHIMA Hirohide

I. はじめに

J. Grimm がその „Deutsches Wörterbuch“ において述べているように、ge- はドイツ語前綴りのなかでも最も不思議なもの (das merkwürdigste) であるといえる。現在ではこの前綴りは、それ自身の意味が意識されることもなく、単に過去分詞の目印として語頭に添えられるに過ぎないと見なされているのだが、この ge- を歴史的に遡ってみると、他の前綴りと同様に、具体的な空間的意味合いを本源的にもっており、そこから時間の流れと共に様々な変化を遂げてきたことがわかる。本稿ではこの前綴り ge- を、名詞、形容詞、動詞のそれぞれの品詞に分けて取り扱い、各品詞における ge- の意味とその用法を通時的に考察していくことにする。

II. ge- 名詞

1. 現代ドイツ語の前綴り ge- は、本源的には前置詞から発生したものと考えられているが (Paul, DUDEN-Etymologie) これを形態的に遡ってみると、初期新高ドイツ語では ge-, 中高ドイツ語では ge-, gi-, 古高ドイツ語では gi-, ga-, そしてゴート語では ga- という形態をとっていた。また gi-, ga- は ki-, ka- という形でも用いられており、これらはラテン語の con-(com-, co-), cum に対応するものと考えられている¹⁾。ラテン語の cum は „mit, zusammen (共に)“ という意味を表す前置詞であり、従ってこの意味 zusammen が現代ドイツ語の前綴 ge- の基礎を成しているのである。このことを前提にして Grimm の記述を中心に ge- の用法を歴史的に概観してみると、まず古ザクセン語に次のような興味深い用法が見い出せる。alts. gesunfader. これを各構成要素別に分解してみると、ge(und) + sun(söhne)²⁾ + fader(vater) となり、これは söhne und vater(Grimm) と同じことを意味している。ここでの ge- は現代語の接続詞 und の役割を果たしているが、und のように語と語の間には現れず、接頭辞として語頭に添えられている。そしてこの und の意味は zusammenに通じるものであり、ここにも ge- の本源的意味が生きている。

nhd. *gespräch*(= *das zusammensprechen*)(Grimm) や、mhd. *geselle* = *ge-*(*zusammen*) + *selle*(<*Saal*) (= *hausgenosse*: 「同居人」) の中にも *ge-* = *zusammen* という *ge-* の本源的意味が見い出されるのだが、これとは別に、„*Scheideweg*, *Kreuzweg* 「岐路」“ の意味をもつ mhd. *gewicke*, ahd. *giwicki* という例では、複数の道が合流する場所(一点)を表わすものとして *ge-*(*gi-*) が考えられており、また、mhd. *kampfgenōz* には *mitkämpfer* と *gegner*(*Lexer*) (「戦いを共にする者」→「味方」「敵」) 双方の意味が含まれている。そしてこれらの *ge-* の意味に対して Grimm は „*verhältnis (beziehung)*“、つまり「関係」という概念を想定しており、これを本源的意味 *zusammen* から派生したものと位置づけているのである。またさらに、nhd. *gebäude*, *gebilde*, *gespinnst* の例では *zusammenbringen* から発展した意味として „*das fertig bringen (das Fertigbringen)* 「完成」“ が挙げられており、これは動詞に付加された際の *ge-* の「完了化」作用に通じるものと考えられる。

2. さてここで、*ge-* をもつ名詞の例を、*ge-* の意味別に分類してみると以下のようになる。

1. *ge-*: „*zusammen*“ (Kollektivbildung) 「集合名詞をつくる」

Gebilde; *Gebirge* („*Gesamtheit der Berge*“); *Gebiß* („*Gesamtheit der Zähne*“); *Gebüt* (Spätmhd. *geblüete* „*Gesamtmasse des Blutes*“); *Gebot*; *Gebrüder* („*Gruppe leiblicher Brüder*“); *Gebüsch*; *Gedränge*; *Gefährt* (mhd. *gevert* „*weg, zug, fahrt, reise [gesamtheit der geverten]*“ 現在では、*Fahrzeug* 「乗り物、車」を指す); *Gefährte* (元来、*der mit einem zusammen fährt (=reist)*); *Gefäß*(「容器全般」); *Gefieder* (*Gesamtheit der Federn*); *Gefilde* (*Gesamtheit von Feldern*); *Geflügel* (*Gesamtheit der flügeltragenden Tiere*); *Gehäuse* (Spätmhd. *gehiuse* „*Hütte, Verschlag*“); *Gehege*; *Gehöft* („*Gesamtheit der Hofgebäude*“); *Gehölz*; *Gelächter* (mhd. *lahter*, ahd. *lahtar* „*[lautes] Lachen*“); *Gelände*; *Geländer* (mhd. *lander* „*Stangenzaun*“); *Geleise*; *Gelenk*; *Gelichter* (元来、„*die zur selben Gebärmutter Gehörigen*“); *Gemahl* (mhd. *mahel*, ahd. *mahal* „*Versammlungsort*“ < mhd. *gemahelen*, ahd. *gimahalen* „*zusammensprechen*“); *Gemüse*; *Gemüt* (*Gesamtheit aller Sinnesregungen und seelischen Kräfte, Gesamtheit der seelischen Empfindungen und Gedanken*); *Genick*; *Genosse* (元来、„*wer etwas mit anderen gemeinsam besitzt* 「他人とあるものを共有している人」“); *Gepäck*; *Gerät*; *Gerölle*; *Geschlecht* (*Gesamtheit der gleichzeitig lebenden Menschen*); *Geschmeide*; *Geschütz* (mhd. *geschütze* „*Schießzeug*“); *Geschwader* (spätmhd. *swader* „*Reiterabteilung, Flottenverband*“); *Geschwister*; *Geselle* (mhd. *geselle* „*Hausgenosse*“); *Gespräch* (*Unterhaltung*); *Gestade*; *Gestank*; *Gestell* (ahd.

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第15号（1995年）

gistelli „Zusammengestelltes“); Gestirn (mhd. gestirne, ahd. gistirni „Gesamtheit der Sterne“); Gestrüpp (mhd. struppe „Buschwerk“); Gestüt; Getränk; Getriebe (< Treibrad „alles, was von Rädern getrieben wird「動輪により駆動されるものすべて」“); Getümmel; Gevatter („geistlicher Mitvater, Pate“); Gewächs (< „alles, was gewachsen ist“); Gewässer (Wasseransammlung in der Natur, Teich, See「自然界にある水の総称」); Gewehr („Verteidigungswaffe“); Gewitter; Gewürz.

2. ge-: „das Ergebnis des im zugehörigen Verb bezeichneten Vorgangs“ 「動詞において表される現象の結果」

Gebiet; Gebinde; Gebrechen; Gebresten; Gedächtnis; Gedanke; Gedicht; Geflecht; Gefüge; Gefühl; Geheiß; Gelübde; Gemächte; Gemälde (< „Ge- oder Bemaltes“); Gemenge; Gemisch; Geschenk; Geschichte (< „Geschehnis, Begebenheit, Ereignis“); Gespinst (mhd. gespunst „Gesponnenes“); Gewebe; Gewölbe (< „die gewölbte Decke“).

3. ge-: „Vorgangsbezeichnung“ 「現象そのものを表す」、„Verbalabstraktum“ 「動詞的抽象名詞をつくる」

Gebärde (mhd. gebærde „Benehmen“ < mhd. gebæren „sich verhalten“); Gebet (< bitten. 現在では beten との関連も感じられる); Geburt (= der Vorgang des Gebärens, das Geborene); Geduld (< dulden); Gefecht (< fechten); Gehalt (< gehalten, mhd. gehalten „festhalten, behüten, aufbewahren“); Gehör (< hören); Genuß (< genießen); Gepränge (< prangen); Geräusch (< rauschen); Gesang (< singen); Geschrei (< schreien); Geschwätz (< schwatzen).

4. ge-: „verstärkende Bildung“ 「強意」

Gefahr (< veralt. Fahr „Gefahr“); Geruch (mhd. ruch „Geruch, Dampf, Dunst, Rauch“); Gezeiten (mhd. gezît „Zeit, festgesetzte Zeit“, ahd. gizît „Zeit, Zeitlauf“).

III. ge- 形容詞

1. さて ge- は形容詞の語頭にも現れるのだが、ここにも ge- の本源的意味 zusammen は認められる。例えば、nhd. gleich は mhd. gelîch, ahd. gilih, got. galeiks であり、mhd. gelîch が ge- + lich(Leiche) から構成されていることからわかるように、本来この語は、„denselben Körper, dieselbe Gestalt habend (Duden-Etymologie, Kluge)“、つまり「同じ姿、形をした」という意味を表現していたわけで、ここに ge- の zusammen との関係を見い出すことができるのである。また、ahd.

ドイツ語前綴り ge- の変遷について

gaherz, gihel などの „übereinstimmend, einstimmend「一致」“ という意味も zusammen を基礎にしている。

ここで mhd. geveder(gevider) という形容詞に目を向けてみると、その意味するところは „mit federn versehen, befiedert「羽毛をつけた」“ となり、ge- には zusammen から派生して「～を備え付ける」という ornativ 的意味もあることがわかる。

ornativ 機能をもつ前綴りとしてよく知られているものに be- があるが、ornativ の作用において ge- と be- は共通しており、従って ge- は be- と交換が可能である。mhd. geschuht = beschuht; ge-, be-bartet. また、mhd. geriten > nhd. beritten となるように、分詞形容詞に添えられた ornativ 的意味をもつ ge- は、時代の流れと共に be- に取って代わられたように思われる。ge- が be- と交換され得るのは、主に ge- が過去分詞において用いられた場合であるので、つまりこの be- との置換現象は、ge- がその具体的な意味内容を失い、単に「過去分詞の目印として付加された前綴り」とみなされるようになってしまったため、具体的な意味が希薄となった ge- に代わって、意味的により明確な be- が現れたと考えられるのではないだろうか³⁾。

2. さて上述のように、ge- は本来の空間的意味を失い、動詞の過去分詞を示す指標として用いられ、いわば文法的性格を帯びるようになったのだが、このことはゴート語の前綴り ga- においてもすでに見られた現象で、その原因について Grimm は次のように述べている。„das bedürfnis, die handlung o. ähnl. als fertig, abgeschlossen zu bezeichnen.“ つまり、行為を、やり遂げられたもの、完結したものとして表す必要性からこの前綴りが用いられるようになったというのだが、ではなぜ ge- が動作の完了を意味するようになったのだろうか。これについては後で、動詞との関連において言及することにする。

いずれにしても、ge- は現代ドイツ語において、大多数の過去分詞に付加される前綴りになっているのだが、すでに他の Präfix をもっている動詞の場合、その過去分詞に ge- が付加されるということはない⁴⁾。このことについて Grimm は外的、内的の二つの理由を挙げて説明している。

外的：ge- がその語のアクセントの位置から、すでに付加されている Präfix の音節によって隔てられて存在するには（音声的）に軽すぎるため。つまり ge- + ver- + Simplex のように、ver- によって ge- が基礎動詞から隔てられて存在できるほど ge- の音節は強くはないということである。

内的：er-, ver-, zer-, ent- にはすでに、ge- がもっている「完了（完成）」の意味が含まれているため。例えば er-, zer-schlagen; ver-, ent-wenden などにおいては、それぞれの基礎動詞によって表現される行為が、Präfix の付加により完結しており、その目的が達成されていると考えられるからである。これは be-

についてもいえることで、上述のように be- は ge- と意味的にも類似し、置き換えが可能であることからわかる。

この内的な理由から、助動詞 werden の過去分詞に ge- のない worden という形が用いられることも説明されるであろう。つまり worden は、意味、アクセントにおいて geworden よりも軽い(an sinn und ton leichter)からである。

3. ここで、ge- をもつ形容詞の例を、ge- の意味別に分類してみると次のようになる。

1. ge-: „zusammen, einmütig“ 「共に、一致した」

geheim (< zum Haus gehörig, vertraut); geheuer (< zum Hauswesen, zur Hausgemeinschaft gehörig); gemach (ahd. gimah „zusammengehörig, passend, geeignet“); gemein (mhd. gemeine „zusammengehörig, gemeinschaftlich, allgemein, vertraut“, ahd. gimeini „gemeinsam, übereinstimmend, zugleich“); gerade (mhd. gerat, ahd. girat „gleichzählend“); gerecht (mhd. gereht „gerade, passend, mit dem Rechte übereinstimmend“); gewiß („von vielen oder allen gewusst?“ ge- の „einmütig「一致した」“ という意味に関連して、Grimm は gewiß に対して、「多くの、あるいはすべての人に知られている」という意味の可能性を指摘している。)

2. ge-: „versehen mit etw.“ 「備える」

geblümt; geharnischt; gesinnt (mhd. gesinnet „mit Sinn und Verstand begabt“); gestirnt (mhd. gestirnet, ahd. gistirnöt „mit Sternen versehen“. 過去分詞になって造語されているが、この形容詞は動詞から派生したものではなく、名詞 Stern から直接形成されたものである。); gestreift.

3. ge-: „verstärkende Bildung“ 「強意」

gefräßig; gehässig; gelinde; genau (mhd. nou „eng, genau, sorgfältig“); geraum; geräumig; gering (mhd. ringe „leicht, klein, wenig, unbedeutend, gering“); geschwind (mhd. swinde, swint „stark, heftig, rasch“); getreu; gewahr (got. wars „behutsam“).

IV. 動詞

1. さて次に、動詞に ge- が付加される場合を考えてみると、ここでも ge- の本源的意味 „zusammen, überein“ は認められる。got. gagaggan(= zusammengehn, sich versammeln), got. garinnan(= zusammenlaufen), mhd. gehellen (= übereinstimmen) < hellen(= hallen, ertönen). さらに、mhd. gestân では ge- (=zusammen) + stân(=stehen) から „ihm beistehen, helfen (Lexer)“ 「助ける」という意味も見られる。

しかし got. *gaainan* には、„vereinzeln, trennen“⁵⁾「個別化する、分離する」という意味があり、この場合では、ge- の本来の意味 *zusammen* とは逆の概念が表現されているように思われる。ここで、先に名詞に関連して述べた ge- のもつ「(複数のものの間の) 関係(*verhältnis*)」という概念を適用してみると、この *gaainan* の「分離」の意味も説明がつくものと思われる。その他に *gehören* では、mhd. *gehœren*, *gehören* < ahd. *gehōrian*, *gihōren* < got. *gahausjan* という変化を遂げおり、ゴート語の *gahausjan* は ga- の付加により、「聞いて(*hausjan*)理解する(*gahausjan*)」という意味をもつようになっている。従ってこの場合の ga- は完了化の作用をもっていたことがわかるが、mhd. *gehœren* ではまだ *hören*「聞く」という基礎動詞の意味が生きており、ここから *zuhören*「傾聴する」→ *gehörchen*「従う」という意味へと発展、現在の「帰属する」に至ったものとも考えられる。またこの *gehören* は所属関係の他に、主従の従属関係をも表現しており、ここに ge- の「関係(*verhältnis*)」概念が見てとれる。

あるいはまた *glauben* は、本来 got. *galaubjan* > ahd. *gilouben* > mhd. *gelouben* からきたものであって、ge- の前綴をもつ動詞であった。この語は形容詞 *lieb* と関連しており、got. *galoubjan* には „für lieb halten“ という意味が含まれていた。そこから「神と人間との信頼関係」が表現されるようになり、これがさらに一般化され、今日の意味に至ったと考えられているのである。

さて、動詞における ge- は、現在では主に完了化の機能を担うものとみなされる場合が多いが、ge- には *zusammen* という本源的な意味があったことから考えてみると、*zusammen*, *überein*「共に、一致」→「集まる(*kollektiv*)」→「一点に集中する」→「全く(*ganz*)、十分に」という経緯を経て、「完成、完了(*vollständig*)」の概念に至ったものと推測される。つまり ge- には、基礎動詞の行為(現象)自体ではなく、その行為が行われた結果どうなったのかという、後の結果に意識を向けさせるような作用があるものと思われる。ゴート語でも ga- は主に完了相(決定相)⁶⁾を示しており、*saihwān*「見る」- *gasaihwān*「認める」、*hausjan*「聞く」- *gahausjan*「理解する」；*standan*「立つ」- *gastandan*「立ち止まる」、*bairan*「妊娠する」- *gabairan*「生む」；got. *brikan*(= *brechen*) - *gabrikan*(= *ganz brechen*, *zerbrechen*) というような ga- の作用が見られる。また、ahd. *winnan*(= *sich anstrengen*, *kämpfen*) - *giwinnan*(= *durch Anstrengung erreichen*, *erobern*)、mhd. *strīten*(= *streiten*, *kämpfen*) - *gestrīten*(= *mit dem kampf fertig sein*) など、時代が下っても ge- の完了化機能は保持されている。この *Perfektivierung* に含まれるものとして、*inchoativ* を表現する例も報告されている⁷⁾。mhd. *gelinden*(= *weich werden*)、*gestillen*(= *stille machen*, *aufhören machen*, *zur ruhe bringen*; *stille werden*, *aufhören*, *ruhen* [Lexer])。

このように、ge- の付加による完了化の作用は各時代を通じて見られる現象なのだが、さらに先に挙げた got. *gastandan* には „stehen bleiben“ の意味もあり、また中高ドイツ語では、mhd. *gastân*(=stehen bleiben), *gesitzen*(=sitzen bleiben), *gestecken*(=stecken bleiben) といった例もある。Grimm はさらに、いずれも「横たわる」意味の mhd. *ligen* と mhd. *geligen* という例を挙げ、前者は「いつでも再び起き上がることができる人について述べられる」のに対し、後者は「すぐには起き上がらないか、あるいは再び起き上がることはまったくない(z.B. *tôt gelac*)」場合に用いられるとしている。つまりこれらの例から Grimm は、ge- と *dauer*「継続」の意味との関連性を主張するのである⁸⁾。しかしながら、上述の例は、すべてその基礎動詞がもともと継続相を示すものであり、ge- によって継続的な Aktionsart が付加されたとはいえない。むしろこの場合は、ge- によって基礎動詞の継続状態が強調されていると考えられるのではないだろうか。

2. さて ge- の完了化作用と関連して、完了的な Aktionsart をもつ動詞の現在時称は、未来の意味をもつことが Dal によって指摘されている⁹⁾。(Ich komme bestimmt./ Ich treffe dich an der Kirche.) そのため、動詞の現在形に ge- を付加し、当該の動詞を完了化することによって動詞の未来形を形成するという操作が行われていた。mhd.:ich weiz wol waz Kriemhilt mit disem scatze getuot. NL 1272,4¹⁰⁾ .

次に、過去時称に関してであるが、過去時称は 古高ドイツ語、中高ドイツ語時代には今日の過去完了の意味を表現していたことが知られている。そして、過去完了時称を表す過去形にしばしば付加されたのが、前綴りの ge- であった。: *dô er für mich gestreit* „als er für mich gestritten hatte“¹¹⁾ ./ *er gesaz* „er hatte gesessen“¹²⁾ .

このように、ge- による完了化作用は時称にも影響を及ぼしてきたのだが、韻文において ge- が使用されている場合は、この ge- が完了化のためのものか、あるいは韻律を調整するために付加されたものなのかを考慮に入れることが必要であろう¹³⁾。

3. さて、先にも述べたように ge- は基礎動詞の行為を完結したものにするという作用をもつため過去分詞に転用され、現在では ge- は過去分詞の目印のように感じられるまでになっている。現在では、他の Präfix をもつ語や外来語を除いて、原則的に ge- は過去分詞に付加されることになっているが、この過去分詞に添えられた ge- の有無については、ドイツ語の歴史を通じてあまり確定的なものではなかった。まず、古高ドイツ語においては、それ自体がすでに完了的な Aktionsart をもつ語の過去分詞には、完了化作用をもつ ge-(ahd. gi-) は付加されない。あえて ge-(gi-) を付加する必要がなかったからである。従って ahd. *queman* „kommen“ の過去分詞は *queman* あるいは *quoman* であり、*findan* „finden“ の過去分詞は *funtan*、*bringen* „bringen“ では *brungan* あるいは *braht* となる。しかしながらこれはさほど強い文法規則に従ったもの

ではないらしく、ahd. *treffan* の過去分詞には *troffan* と *gitroffan* の両方が共存している。そしてこの傾向は中高ドイツ語においても続き、ge- のない *troffen* という形が支配的であった¹⁴⁾。中高ドイツ語ではさらに、*lāzen* „lassen“ - *lāzen*, *geben* „geben“ - *geben*, *nemen* „nehmen“ - *nomen* などの ge- をもたない過去分詞も使用されており、初期新高ドイツ語においてもまだこの傾向はよく見られる。すでに完了的 Aktionsart をもっている動詞の過去分詞に ge- が付かないのは従来通りなのだが、初期新高ドイツ語では、本来から完了的 Aktionsart をもっていないような動詞の過去分詞にも、ge- が付加されないという現象が見られる。これは音声的な面から説明され得るもので、*geben* や *gehen*, *greifen*, *glauben* などのように、語頭音が g-/k- で始まる動詞の過去分詞では、こういった語頭音と前綴り ge- とが同化してしまい、ge- をもたない過去分詞の形が形成されたものと考えられている。また *essen* の過去分詞では、正しくは *geessen* となるべきところであるが、ルター聖書ではすべて、ge- の母音と *essen* の語頭音が同化した *gessen* という形が用いられていることも報告されている¹⁵⁾。

このように、ge- の過去分詞への付加は、必ずしも確定的な文法規則のもとに行われたのではなく、多分に不安定なものであったのだが、時代の流れと共に安定化していき、*gefunden*(< *finden*) という形の過去分詞が現れるようになるのは15世紀後半、*gebracht*(< *bringen*) については16世紀後半から用いられるようになり、18世紀になってようやく ge- は過去分詞の接頭辞として定着するのである¹⁶⁾。

ここで、ge- をもつ動詞の例を、ge- の意味別に分類してみると次のようになる。

1. ge-: „zusammen, überein“ 「共に、一致した」

gedenken („zusammen“ → „Verhältnis“ の意味へと発展したのではないだろうか。); *gefrieren* („zusammen oder fest frieren“ [Heyne]); *gerinnen* (ahd. *girinnen* „zusammenfließen“, got. *garinnan* „zusammenlaufen“).

2. ge-: Perfektivierung „Beginn oder Ende eines Geschehens“ 「完了化」

gebären (mhd. *bern*, ahd. *beran* „tragen, bringen“ → ahd. *giberan* „zu tragen aufhören“); *gebrecnen*; *gebühren*; *gefallen* (サイコロが落ちた(*fallen* した)結果に意識が向けられている。); *gehaben* (got. *gahaban* „in Besitz nehmen“ [Henzen]); *gelingen*; *genesen*; *genießen*; *gereichen*; *gereuen* („Eintritt des Zustands“ [Trübner]); *geschehen* (ahd. *skehan* „eilen, schnell fortgehen“. „sich ereignen「起こる」“ という意味は、„schnell vor sich gehen“ から発展。); *geschweigen* (mhd. *geswîgen*, ahd. *giswîgan* „Beginn des Schweigens, das Verstummen“ [Trübner]); *gestatten*; *gewinnen* (mhd. *winnen*, ahd. *winnan* „kämpfen, streiten, sich anstrengen“ → mhd. *gewinnen*, ahd. *giwinnan* „durch Anstrengung oder Kampf erreichen“. また、ahd. *winnan* に „erringen, erlangen“ の意味を認め

て、この場合の *ge-* を「強調」ととることもできる。).

3. *ge-*: „verstärkende Bildung“ 「強意」

gebieten; *gedeihen* (mhd. *dīhen*, ahd. *thīhan* „wachsen, gedeihen“); *gehören* (ahd. *gihōrian* „hören, anhören, gehorchen“ → 「傾聴する、従う」から「帰属、所有」へ発展。Grimm では「関係」概念); *gelingen* (mhd. *lingen*, ahd. *gilingan* „glücken, Erfolg haben“); *geloben*; *geruhen* (mhd. *ruochen*, ahd. *ruohhen* „Rücksicht nehmen, besorgt, bedacht sein“); *gestehen*; *gewähren* („ein verstärktes *währen*(=dauern)“ [Trübner]); *gewöhnen* (mhd. *wenen*, ahd. *wennen* „gewöhnen“).

V. おわりに

以上、歴史的な流れを考慮しながらドイツ語前綴り *ge-* を考察してきたわけだが、最後に、本稿で DUDEN-Etymologie を中心に取り上げた例語について、*ge-* に含まれる意味の割合を示しておくことにする。

各品詞における *ge-* の意味の割合

<i>ge-</i> 名詞		<i>ge-</i> 形容詞		<i>ge-</i> 動詞	
<i>zusammen</i>	54(59.3)	<i>zusammen,</i> <i>einmütig</i>	7(31.8)	<i>zusammen,</i> <i>überein</i>	3(11.5)
<i>Ergebnis</i>	21(23.1)	<i>Versehen</i> <i>mit etw.</i>	5(22.7)	<i>Perfektivierung</i>	14(53.8)
<i>Vorgangs-</i> <i>bezeichnung</i>	13(14.3)	<i>Verstärkung</i>	10(45.5)	<i>Verstärkung</i>	9(34.6)
<i>Verstärkung</i>	3(3.3)	—	—	—	—
計	91		22		26

()内は%

この表からもわかるように、前綴りに *ge-* をもつ語のなかでは、名詞の占める割合が最も大きい。そして各品詞における *ge-* の意味の割合に関しては、名詞において „*zusammen*“ という *ge-* の本源的意味が最も多く認められ、形容詞では「強意」、動詞では「完了」の意味がそれぞれの品詞において最も多く現れた。

ドイツ語前綴り ge- の変遷について

注)

- 1) Grimm, Jacob: Deutsche Grammatik. 4 Bde. 2. Ausg. Berlin 1870 - 1898. Bd. 2. S. 740, 819.
- 2) „-sun-“ は本来の „sunî“, „sunu“ が語中に入ったため短縮された形。
- 3) ge- と be- の置換可能性については、両者の音声的類似も指摘されている。(Grimm, J./Grimm, W.: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854 - 1971. (dtv) Bd. 4. S. 1623.)
- 4) 14世紀には、„geverkauft“, „vergesichert“ といった形も存在していた。
- 5) Holthausen, Ferdinand: Gotisches etymologisches Wörterbuch. Heidelberg 1934. S. 3.
- 6) Mossé, Fernand/高橋 博 (訳): 「ゲルマン語・英語迂言形の歴史」 東京(青山社)1993. S. 14.
- 7) Grimm, Jacob: Deutsche Grammatik. Bd. 2. S. 827.
- 8) Grimm, Jacob: Deutsche Grammatik. Bd. 2. S. 828.
- 9) Dal, Ingerid: Kurze deutsche Syntax. 3. Aufl. Tübingen 1966. S. 133.
- 10) Paul/Wiehl/Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik. 23. Aufl. Tübingen 1989. S. 290.
- 11) Dal, Ingerid: ebd. S.135.
- 12) Paul/Wiehl/Grosse: ebd. S.239. また、„er gesaz“ が単に „er saß“ を意味する場合もあった。
- 13) 中高ドイツ語では ge- の付加についての文法規則はなく、ge- 動詞と基礎動詞との間に意味的差異がないという場合もしばしばである。(Oksaar, Els: Mittelhochdeutsch. Stockholm/Göteborg/Uppsala 1965. S. 366.)
- 14) Braune/Eggers: Althochdeutsche Grammatik. 14. Aufl. Tübingen 1987. S. 270.
- 15) 塩谷 饒: 「ルター聖書のドイツ語」 東京(クロノス) 1975. S. 72.
- 16) Ebert/Reichmann/Solms/Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993. S. 237.

上記以外の参考文献

- Duden: Etymologie. Herkunftswörterbuch der deutschen Sprache. 2. Aufl. Mannheim/Wien/Zürich 1989.
- Henzen, W.: Deutsche Wortbildung. 3. Aufl. Tübingen 1965.
- Heyne, M.: Deutsches Wörterbuch. 3 Bde. 2. Aufl. Leipzig 1905 - 1906. (Nachdruck Hildesheim/New York 1970)
- Kluge, F.: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 22. Aufl. bearbeitet von Elmar Seebold. Berlin 1989.
- Lexer, M.: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 37. Aufl. Stuttgart 1983.
- Mackensen, L.: Ursprung der Wörter. München 1985.
- Paul, H.: Deutsches Wörterbuch. 9. Aufl. Tübingen 1992.
- Paul/Stolte: Kurze deutsche Grammatik. 2. Aufl. Tübingen 1951.
- Pfeifer, W.: Etymologisches Wörterbuch des Deutschen. 2 Bde. 2. Aufl. Berlin 1993.
- Trübners Deutsches Wörterbuch. Begr. von A. Götze, hg. von W. Mitzka. 8 Bde. Berlin 1939 - 1957.